



教職大学院 Newsletter

No. 118

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.2.3

「エジプト・日本教育パートナーシップ (EJEP)」による 研修がスタートしました

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科（教職大学院）は、エジプトの若者の能力強化を目的とした「エジプト・日本教育パートナーシップ (EJEP)」の人材育成事業 (EJEP-HRDP) により、2021 年度までの 4 年間にエジプトから約 680 名の教員を研修員として受け入れることとなりました。

本研修プログラムは、「TOKKATSU+School Governance Management（学校運営）」、「TOKKATSU+Activities（技能教科等の教育活動）」、「TOKKATSU+Learning Improvement (Lesson Study)（授業研究）」、「TOKKATSU+Early Childhood Education（幼児教育）」の 4 コースから成っています。1 組約 20 人の研修員を 4 週間ずつ、計 34 回受け入れます。教育学部附属学園や公立学校で日本の特徴的な教育の手法を学ぶほか、今後、本学教員がエジプトの現地を訪れ、帰国後の取り組みをフォローアップするなどしながら包括的な支援を行います。

(<https://www.u-fukui.ac.jp/news/43797/>より抜粋)



その最初の研修員の方を迎えて、1 月 31 日には開講式が行われ、福井大学を代表して寺岡英男副学長による歓迎の挨拶がありました。以下、挨拶文を掲載いたします。

「みなさんこんにちは。福井大学を代表しまして、心より歓迎の挨拶をさせていただきます。

今回のプログラムをお聞きし、これまでにない規模の研修を引き受けることになることで、驚いておりましたが、今日の日を迎えることができまして、喜んで



内容

- 「エジプト・日本教育パートナーシップ」研修スタートのお知らせ (1)
インターンシップ/木曜カンファレンス報告 (2)
冬期集中講座 報告 (6)
至民中学校公開研究会 参加報告 (9)
ラウンドテーブル 参加報告 (12)
長崎大学 静岡大学 東京 赤塚二中
2 月ラウンドテーブル案内 (21)
スケジュール (28)

おります。この間エジプト大使館、そして JICA の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。

私どもの福井大学教職大学院が、エジプトの学校改革のために連携させていただける機会を与えられたこと、大変ありがたく思っております。福井大学の教職大学院は、これまで学校拠点というユニークな方式の下に、学校と協働して、学校改革、カリキュラム改革、そして教師の専門性開発の取り組みを進めてきました。それを踏まえて、私たちが、この共同のプログラ

ムに貢献できますことは、確信を持って申し上げられると思います。

このあと福井に来られるわけですが、私もときどき顔を出させていただきたいと思います。これからの福井での研修が、研修生の皆さんにとって、意味のあるものになりますよう祈念し、私の挨拶とさせていただきます。」

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

見えない“なにか”を求めて

授業研究・教職専門性開発コース1年／福井市中藤小学校 家高 里佳

4月、期待に胸を膨らませ福井大学教職大学院の門をたたいて早10ヵ月。いろいろな考えをもった方と多様なテーマで話し合いながら“自分”という人間を探っていく時間を過ごさせていただいたように感じている。様々な場で、学び方をはじめ物事に対する見方考え方等、いろいろな価値観に触れることができ、“自分”という人間がどんどんとアップデートされていくような、それでいて“自分”という人間の核となるものが明らかになっていくような、なんとも形容しがたい不思議な感覚を覚える日々であったように思う。

平成最後と形容されながら季節は移り2019年へと年をまたいであつという間にスタートラインへと立たされた。1月の木曜カンファレンスで私を待ち受けていたのは、年度単位での学びのふり返しである。インターンシップでのことはこれまでのふり返しを積み重ねて各々の実践を捉えなおし報告書の執筆を進めている。木曜カンファレンスでは特に、今年度の木曜カンファレンスにおける取り組みをふり返し、捉えなおすことになった。

思い起こせば、手探り状態でスタートした院生生活。特に木曜カンファレンスに関しては、企画の目的を明確に見極めることが難しいと感じることが多く、“この企画を実施する意義は何だろう”“この企画で得られるものとは？”等、木曜カンファレンスでの活動を通して自分は何かができるようになるのか、ゴールの見えない活動に向かう苦しさを痛感することとなった。というのも、これまでは目の前に

明確な目的やゴールが見えている学びを経験することが多かったためであろう。この思いは幸いにも、自身が授業実践を行う際に子どもに同じ思いをさせたくないという思いにつながっていった。暗中模索という言葉が表しているように、手探り状態の木曜カンファレンスではこれまでとは異なる学びの形態に困惑しながらも、何とか自分なりに意義付けられはしないものかと模索しながら取り組むこととなった。私たちが企画運営にかかわらせてもらったのは後期からで、前期は先輩方が企画運営をしてくれていた。そのこともあってか前期の時点では、まだこれまでの“正解”がある学び方との離別ができておらず、先輩方がこの企画で何を意図しているのか、先輩方が図った学びに自分はたどり着けているのだろうか等、企画者の意図を、企画者の意図という名の“正解”を求める姿勢であったと言える。しかし、いよいよ企画者の意図に迫ろうとしたとき、企画者が意図していることと私がその企画に感じる意義や得るものはイコールではないのかもしれないと思えてきたのである。それと同時に、ここでの学びのあり方のようなものが実感を伴って見えてきたようにも感じた。これまでの、決められた“正解”にたどり着くものではなく、それぞれの思いが千差万別な学びを生み出していくことを認めているものではないか。同じ場で同じ企画に取り組んでいてもそれぞれがそれぞれの学びを構築していく。そのようにして得た学びを語り傾聴し合うことで、更に学びを深めていく。この10ヵ月をふり返し、この

ことを身をもって体験したからこそ、企画に対して明確な意図が見えづらかったことにも合点がいった。企画者である先輩方の学びのあり方も多様であるのだ、と。それぞれの学びが、それぞれの抱く意図となっていたのかもしれないと思った。

このことに気付けたのは、前期の木曜カンファレンスで行った『大学生版 PISA づくり』の企画に着目して先日ふり返りを行ったおかげである。この企画を終えたことで見えてきた、私たちにとっての意義は何だろうと考えてみると、企画中には見えなかったことが少しずつ明らかになっていった。そこでは、ある人は問題作成者の思いに迫り、またある人は自身の授業実践とリンクして考えを深め、そして PISA そのものに目を向けて現場の教師の授業改善のあり方を捉えた人もいて、各々の思いのもとに学びをふり返っていることが分かった。しかしそのいずれもが、実践サイクルを重んじ、描いていたことは特筆すべき点であると感じている。この実践サイク

ルの築きこそがこの企画の意義であり、各々の学びにとって欠かせないものであったのではないかということが私たちの中で見えてきたのである。

ここまで述べてきて改めて私のもやもやを捉えなおすと、おそらく前期の段階で私が探っていた企画者の意図は上で記した実践サイクルのような“核”の部分にまで迫れておらず、そこに付随する企画者各々の思いであったのではないか。また、“なにができるようになるか”という点でいえば、一朝一夕で“何かができるようになる”段階にはない学びを、今、積み重ねているのだと考えられる。この 10 ヶ月、見えない“なにか”を求めてもやもやを抱え続けたことは自身にとって苦しい時間ではあったが、このもやもやこそが思考するというものであったのだと、そのもやもやを同期と共有し語り合うことができた環境が私にいろいろなことを気付かせてくれたと感じている。

今はまだ見えないけれど

授業研究・教職専門性開発コース 1 年／奈良女子大学附属小学校 藤田 若奈

「あの子、迷いがあるよね。」

運動会に向けてダンスの学習をしているとき、ダンスを担当されている先生がそう仰った。しかし、それが私には分からなかった。私の見えていないものが、先生には見えている。先生は、子どものどこを見てそのように思われたのだろうか。

そのことを木曜カンファレンスで話させて頂いた。子どもの思いや考えを知ろうとすると、私は子どもの発言や記述に頼りがちである。けれども、子どもの言葉のみでは分からないこともある。その言葉には、子どもの本心が隠されていることがあるかもしれない。またその言葉は、子どもが自覚している部分のみが語られており、その奥には自覚されていない、より大事なことが隠されているかもしれない。これらのような、子どもたちの言葉にできない“メッセージ”を、子どもの身体から読み取るべく、2 か月にわたってダンスの学習に参加させていただくことになった。

観察させていただくが、子どもたちのダンスをどのようにして見たらよいのかさっぱり分からなかった。先生に「どのように子どもたちのダンスを見ておられますか」とお聞きしたところ、「全体をぼんやりと見て、それから気になる子に焦点を当てて、その子

からまた全体に戻っているかな」と教えてくださった。それを意識して観察させて頂き、それと並行して、実際に子どもたちと一緒に踊らせていただくこともできた。すると次第に、これまで踊りが目立つ子どもばかりを目で追ってしまっていたが、どう踊ったらよいかわからずに戸惑いながら歩いている子どもの姿にも目を向けられるようになった。また、ぼんやりとしか見えていなかった子どもたちの表情が、はっきりと見えてきた。「全体」と「個」を行き来する視点の動かし方を、何となくであるが掴んできた。それでも、まだまだ私には見えていないものが先生には見えており、毎回その観察眼には驚かされた。

ちょうど同じ頃、奈良女子大学附属幼稚園の先生方とお話しさせていただく機会があった。そこで、ある先生が仰ったことが印象に残っている。基本的に同年齢の子どもたちの教室の配置は毎年同じように設定されてきたそうだが、ある時、「あ、この子たちはこれまでと同じ配置ではいけないな」と思い、配置を変えたという。その先生は続けて「子どもによって配置を変えるということが、今になってできるようになってきた。なぜそのように配置を変えるかは言葉にできないけれど、感覚的にそうした方がよいと感じた。」と話された。その感覚を得るまでに、10 年か

かったそうである。

また、幼稚園の先生方は、「種をまく」という言葉をよく使われる。あるねらいを持った活動に繋げるために、それまでの日々の生活の中に「種」として仕掛けておくのである。その「種」をまくのには適したタイミングがあるらしい。「ああ、『種』をまくには早すぎた…」と後悔されることもしばしばあるようである。経験を重ねるにつれて、「今だ！」とそのタイミングが感覚的に分かるようになるらしいが、それがいつかと聞かれても言葉にはできないと多くの先生が仰っていた。

これらの話をお聞きして、木曜カンファレンスで読み進めているドナルド・A・ショーンの著作である『反省的实践家』で述べられている「行為の中の省察」について思い出した。言葉でうまく言い表すことはできないけれど、複雑な行為を行うことができる。そのような、行為の中で暗黙に知っていることをふり返る。幼稚園の先生方が仰る「言葉にはできないが、感覚的に分かる」というのは、まさに行為の中で暗黙に知っている状態だと思った。

ダンスにおいても同じである。「どのように子どもたちのダンスを見ているのか」という私の無茶な質問に、先生は頭を捻りながら答えてくださった。き

っと、先生も経験を重ねられる中で、子どもたちを見る視点や教師の出るタイミングなどが、身体に染みついておられるのだろう。子どもを理解しようとすることに、決まった手段や方法は存在しない。それを探るためには、これまで先生がされてきたように、自分の身体をもって、その感覚を自らの身体に染み込ませるほかないのである。

木曜カンファレンスで、「身体を『場』に馴染ませる」という言葉が出てきた。自分自身の身体を、その「場」に馴染ませなければ、大事なことが起きていても、それに気づかず一瞬にして消えてしまう。

「あの子、迷いがあるよね。」

私は1つの大事なことを見逃してしまった。2か月にわたって「場」に馴染むことを試みようとしたが、私の観察眼はまだまだ乏しい。幼稚園の先生は、感覚を得るのに10年かかったと仰っていたので、そんな簡単に身につくはずがない。けれども、見ようとしなければ、大事なことは見えてこない。先生方の仰る「感覚」とはどのようなものだろう。いつか自分にもそれが分かる日が来ることを楽しみに、日々の行いの中で、感覚を研ぎ澄まし、省察を繰り返しながら、子どもたちと過ごしたいと思う。子どもたちの大切な瞬間を逃さないために。

“自分らしさ”を問い続ける

授業研究・教職専門性開発コース1年／附属義務教育学校前期課程 三村 桃加

大学の講義の中に西洋倫理思想史という哲学の授業があった。ハイデガーの「存在とは何か」という問いに対する考え方について、教授が90分間話している授業であった。多くの学生は単位をとるためだけにその授業を履修していたように思う。しかし、自分にとってはその授業が非常に楽しい時間であった。「存在とは何か」というような哲学的問いは、答えもなければ、終わりもない問いである。言ってみれば、考える必要のないことなのかも知れない。しかし、私は、今までの経験の中から根拠を示し、現段階での自分の中での答えを探し、一般的な答えがなくても自分なりの答えを見つけていくことは必要のあることだと感じる。そして、その自分なりの答えは、絶えず更新され、時間が経てば変わっていくものである。その絶えず更新されうる答えを、常に見つけていくことが楽しく、意義のあることであると感じている。

これは、教職大学院での学びと似ているところがあると感じる。“良い授業とは何か” “主体的・

対話的で深い学びとは何か”など、このような問いは、言葉で言い表すことはできるかもしれない。しかし、言葉だけで言い表した答えは必ずしも自分にとっての答えとイコールになるわけではないと思う。自らの経験による裏付けがあるからこそ、自分にとっての答えが生み出されると考えている。木曜カンファレンスでの午前の学習では、学生が主題を設定し、その主題にそった学びを自らデザインし、語り合うことを通して理論に当たる部分を構築していつている。しかし、すべての主題に対しての答えが、自分に落ちてくるわけではない。言葉では分かるけど、どこか抽象的で、自分のものにはなっていないような感覚に陥る。それが、自分のものとして、自分の学びとして昇華していくためには、経験の中の根拠が必要になってくる。理論を構築していくには、それを裏付ける実践が必要となってくるのである。その実践を背景に、現時点での自分なりの答えを探っていくという部分には、哲学での学びと通じるところがあ

るのではない。理論には実践による裏付けが必要で、実践が自分の引き出しの中に貯蓄されていないと、極論は理論が構築されていないのである。

ハイデガーは、著者『存在と時間』のなかで、「人間」を「人間」と呼ばずに「現存在」と呼んだ。なぜ、「人間」とは呼ばないのか。ハイデガーによると、人間の本質的なところは「私」「あなた」「彼」「彼女」のように異なった存在であることなのである。つまり、各自はそれぞれが「自分だけの」現実と直面しているのであって、現実問題として、その「現実」に対応することができるのは、私以外にはいないわけである。私はよく、本を読んで理論を構築しようとするとき、教育に関わる理論を学ぶとき、いまいちピンとこない時がある。言葉としては理解できるのに、具体的な実践による裏付けがほしくなる。ハイデガーの考えに沿うと、自分はその理論における「現実」に対応することができていないのだろう。つまり、ハイデガーが言うところの「現存在」として、自分は存在していないことになる。

私が、教職大学院での学びのなかに、哲学的問いを設けるとしたら“自分らしさとは何なのか”である。では、「私」を他の人ではない「私」たらしめているのは何なのか。自分固有の状況と直面して、その中で自分のあり方を選び取っていくこと、そしてその繰り返しで「私らしさ」を形作っていくのではないだろうか。自分固有の現場で経験した「プロセス」が「私らしさ」を作り出し、「私らしさ」が「自分」という存在を確立しているのである。教職大学院での学びでは、自分らしさに対する答えが垣間見えてくる。ハイデガーは、現存在は世界という枠組みのなかで存在するという。絶えず、その枠組みを意識しながら現

存在は存在し、また、その世界のなかには他人も存在する。他人とは、自分も含めて世界のなかに構成員として属している人々であり、他人も自分も含めて共同存在であるのだという。そして、自分という存在はまず、共同存在として生きているのだという。教職大学院では、共同存在として協働的な学びを行うことで、「自分らしさ」の答えに近づいた経験がある。それは、一人での学びではなく、協働的な学びであるからこそ、成し得ていると考える。木曜カンファレンスで、自分が授業をつくる際に、どんな視点に重きを置くかを他者と比較しながら考えた時があった。ダイアモンド・ランキングの中に、9項目（子どもたちにつけたい資質・能力、子ども同士の対話、子どもと教師の対話、学びの環境等）を各々で位置付けていった。自分の考えを基にグループで話し合ったが、その時感じたのは、各々が大切にしていきたいと考えていることは自らの経験に基づいているということ、また、大切にしていきたい優先順位には、個人差が明確にあったということである。語り合った際には、「今自分ができていないと思うからこそ上位に置いた」とか、「自分が授業したときにこういう失敗があったから、この項目は上位にくる」とか、自らの実践が「自分らしさ」に反映されており、また、全く違う意見を持つ人と意見を交換することによって、自らの考えを「自分らしさ」につなげることができた。

「自分らしさとは何か」を問い続ける先には、自らの教師観に関わる手がかりがあると考え。何を大切にしていくのか、子どもとどのように接していくのか、これからも「自分らしさ」を問い続けていきたいと思う。

個性を生かすことを考え続けた1年間

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校

服部 哲也

福井大学教職大学院教職開発専攻授業研究・教職専門性開発コース、通称ストレートマスターコースでは、毎週木曜日に木曜（週間）カンファレンスという学びのフィールド（授業）がある。私はここで2年間学んできたわけだが、今になって気づくことがある。それは、そのときの立場での自分の個性の生かし方を見失っていたことである。M1のとき、自分のことばかりを考える自分がいた。自分ばかりが話していて、周りに迷惑をかけている気がした。そのためM2からは、聞き手になり、他者を理解する

ことに徹したのである。その結果、自分という個性を見失っていた。

私の個性は人と話しながら整理をすることであると思う。他の院生から「服部が話すことで、考えるきっかけとなる。」「服部が整理しながら話すことで、みんなも整理する機会ができるから話して。」と言われたことがあった。私の長い話でも、私なりに整理しながら話しているまとまりのない話でも、話題を提供するきっかけになっていたのである。また、専門教科である理科を軸とした考え方を

話すことで、根拠や証拠がある、より信頼性の高いものを見つけることの大切さ、算数や理科などの理系科目に見られる構想や構造を大切にする考え方を提供するきっかけになっていたと思う。

M1のときの私にとって、人を理解することは最大の課題であった。木曜カンファレンスでは私自身の理解のために、私が中心となって話してしまうことが少なからずあった。また、インターン先の子どもに対しても理解があまりできていなかったように思う。子どもたちが訴えているサインはいくつもあったはずなのだが、私はそれを見逃してしまっていた。

そしてM2になると、人の気持ちを理解することを目指してカンファレンスやインターンに取り組んだ。他者を理解することでメリットはあった。同じ教職大学院生の仲間やインターン先の子どもの距離間に悩んだ時期もあったが、改善することができたのだ。しかしその活動の中で、自分が個性を発揮できていないことに気づいた。「人の理解をすること＝人の話に耳を傾けること」という風に思い込んだ時期があり、自分の個性を生かしきれないことにつながった。

これまでの省察の中で、自分自身の個性も生かしつつ、他者の個性を生かし、よりよい意見の交わり合いをできるようにすることが現時点の目標であると考えられる。そしてこの目標を細分化すると、2つの課題があげられるように思う。

まず1つ目は、自分の考えを整理して話すことである。いきなり要点を整理して話せるようにはならないが、「ここぞ!」というときに明確に話せるようになりたい。時間短縮にもなり、私自身も話すことができ、相手も話すことができるため、よりよい対話になることが考えられる。そのために、まず紙にメモを書いて、自分の考えを整理していきたい。

2つ目は、資料から読み取った言葉をそのまま使

って、理解したつもりになっていることである。私はそのような資料から読み取った言葉をよくマイブームにし、多用する傾向にある。例えば、大学院入学当初は「子どもの見取り」「理科的視点」などである。M1の夏期集中講座では、「省察」「協働」「コミュニティ」などである。M1の後期には「メタ認知」、M2になると「主体的・対話的な深い学び」である。今までは理解が浅いまま分かった気になって、安易にこれらの言葉を使っていたように思う。これからは資料から読み取った言葉を自分なりに解釈し、自分の言葉で話したい。そうすることで、より自分について深めることができ、他者に私について知ってもらうことができる。

自分のことばかり考える自分がカンファレンスの中で、自分の思いを発言できるようになった。その発言に対して、周りの方々からアドバイスをいただいた。自分にとって良い評価、悪い評価があったが、それを取り入れていった。その結果、内面にこもっていた自分が外面に出るようになり、お互いの関係性がよくなった。今後、自分のことを考える自分という個性を生かして同じように悩んでいる院生や子どもに気づかせるようなアプローチや関わり方をしていきたい。また、整理しながら話す個性を生かして、院生や子どもの悩みを共有しながら、整理していきたい。インターン先の子どもにあった言葉や院生にあった言葉で子どもの状況や院生の状況を整理したい。相手に寄り添うやり方を共有しながら、伝えていきたい。

これからは、相手の良さを活かしつつ、自分の意見も伝えたい。時にはぶつかり合うこともあるだろう。最初は理解してもらえないかもしれない。しかし、意見の対立を解決する力、人と上手くやる力、人と人をつなぐ力を身に付けたい。そして、人と人をつなぐ存在になりたい。

冬期集中講座報告

“協働”と“学び合う集団”

授業研究・教職専門性開発コース2年/附属義務教育学校前期課程

日野 晶

東京から福井に来て2回目の冬である。昨年は初めて福井で過ごした冬にも関わらず容赦ない雪が降り豪雪を初めて味わい、衝撃を受けた。今年ではできることならば昨年程の雪はやめていただきたいと日々願っている。平成最後の年末に、大学で冬の集中講座に参加し2年目のこれまでを振り返った。3日間、自分と、パソコンと向き合い、記録や夏の集中講座の振り返りを参考に自分の中で2年目のまとめを行った。2年目は大学院での立ち位置も企画側にまわったり、M1を支える立場になったりとして変わった。インターン先でも2年目になり、1年生のクラスに入っていた1年目の頃とは異なり、今年度は6年生のクラスに入るようになった。そこで、2年目になってある視点の変化が起きた。個人へ注目していたことから、集団について考えることが日々多くなった。それは、インターンではもちろんだが、私自身が集団の中で学ぶ仕組みについて考え始めた。冬の集中講座では、「今年度は“人との流れの中で学ぶこと”に注目している自分がいた。」と表記していた。そこで、前回のニュースレターでは“協働”の難しさを感じていることについて書いた。しかし、冬の集中講座で気づいたことは、協働している中で自分も常に学んでいるということだった。

私にとって“協働”は「集団で新しい価値を創り出す、模索する」というふうに意味を捉えている。“集団で学び合うこと”は結局、自分の考えに帰ってくる。“集団で学び合うこと”で、自分自身の成長につながったり、自己の考えの形成につながったりとする。そこで、“協働”とは集団で新たなものを生み出すだけではなく、“集団で学び合うこと”の手段として個の伸長のためにも用いられているのだと考える。冬の集中講座の時、私は「集団で何かを考え合うとか“協働する”ことがうまくいかない。正直、大学院で自分が実際に集団と学んでいる今、言いようのない難しさを感じている。」と思っていた。生きてきた背景や性格も違う全員が同じ考えや、同じように感じ、話の流れを読み取るわけではない。個性としてそれぞれの話し合いの見方やそこから出てくる意見は大事にし

ていないといけない。なぜそれぞれの意見を大事にする必要があるのかといたら、自分にとっても価値のある意見かもしれないし、何よりもその人にとっては考えの中に思いがあることであるため、会議の中でお互いが存在している以上、そのような人の思いは大事にしないといけない。そのようなジレンマから私は冬の集中講座でまとめたことに以下の思いを記していた。

私にとっては“みんなにとって価値のある時間に”という思いが強かったが、その思いも、誰かの価値を潰してしまうことになりかねないと思うと、これまで集団で学ぶ価値を感じてきていながら同時に上手いいかない気持ちから「やめたい」と思うようになった。私にとって集団の中での学びとして“協働”があり、そんな自分の考えを形成する手段の一つの“協働”が自分から学びのために行うものではなく、“協働せざるを得ない”環境になっていた。もう何が何だかわからなくなり、自分とは違う考えをただ拒否するようになっていた。

しかし、そんな中、冬の集中講座でとある先生に「組織の中に目的があり、それに向けて良いものにしていこうとする際に協働をしていこうとなる。」と聞いた。また、別のある先生は、「話が進む中で、こちらにとってわかっている発言していることでも、相手は違うように捉えてしまい、それが葛藤として自分の中で生まれることもありますね。私も若い頃はそうでしたが、今はそんな人との関わりも葛藤と思わなくなったけど。慣れかな。」と共感した言葉をかけていただいた。ここで、“協働”と“集団の学び合う場”が自分の中でごちゃごちゃになっていることに気づいた。“協働”とは「良いもの、もしくは新たな答えを作り出すために、協力して働きあっていくことである。」と考え、“集団で学び合う”ということは、社会の中で様々な人と関わることで、自分の考えを改めて考えたり、視野を広げたり、価値付けることができたりすることである。これは片方に起き

るのではなく、互いが他者と関わることで起きると考える。そこで、私が苦しんでいたのは“協働”することではなく、集団で関わる中での葛藤だった。しかし、その葛藤も乗り越えることで自分の成長につながるものだと考える。乗り越えるというの、相手の立場に立って考えを共感したり、知ったりすることで、私自身の考えの幅や視野も広がることだと考える。前述の先生がおっしゃった「今はそんな人との関

わりも葛藤と思わなくなったけど。慣れかな。」と言った言葉も、慣れなどではなく、葛藤を乗り越えてきたものだと思う。集団などの他者との関わりの中で、一人で悩み苦しむのではなく私はさまざまな人との関わりをもって学びとして捉えていきたいと考える。あと1年の大学院の生活が残っているが、何事も学びに変えて有意義な1年にしたい。

冬の集中講座

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 森本 希美

今年の年末は、寒波がきていたが比較的暖かい中、冬の集中講座が行われたように感じる。12月の集中講座では、M2、M3は長期実践報告書に向けて、M1、3年履修のM2は1年間の自分の実践をまとめる時期に入っている。正直1年目は、自分の記録や日々に追われることが多く、この集中でなにを振り返っていくことが正解なのか迷っていたように思う。しかし、自分の実践を今一度振り返って語ることや文字に起こすことを通して、また新たに価値づけることのできるこの時間は、今だからこそできることでもあるが、これから先も重要なことではないかと2年目の今、実感している。

私はこの大学院に入学する以前は、自分のことを語ることに躊躇していた。自分自身で振り返る時間を持ち、再度目的を持ち直しながら課題であるのかを1人でみつめていけばいいのではないかと考えていたため、自分の実践を振り返ることは重要ではあるが、わざわざ誰かに自分のことを語ることはしなくていいし、自分の心の中に残しておけばいいものではないかと思っていた。

しかし、この教職大学院に入学して自分の考えが変化した。確かに自分1人で振り返る時間は必要でもあるが、教職開発専攻の院生と教職大学院の先生方と行う木曜カンファレンス、インターン校でメンターの先生と話すことで、考え方を共有できる時間を持つことができ、今まで自分が欠点ではないかと思っていたことは、考え方によってはプラスに考えることもできるんだと知ることができた。今まで1つしかないように感じていた考え方が、何通りも考えることができ、自分なりに試行錯誤してみつけていく楽しさもここにきて改めて思い出させてもらったように思う。他にも、自分の思いを語ることによって目標、目的が明確化され、他者に自己を評価されることによって有言実行しようとする意識が高くなった

ようにも感じる。秘めているだけでは伝わらない自分を伝える手段でもあるのかもしれない。今は、自分のことについて要点を絞ってわかりやすく話すことはまだ不十分に思っているが、以前と比べても自分のことを語る楽しさを得られたようにも思っている。

私の考え方が変容した背景には、教職大学院の環境が大きく関わっているように感じている。節目に自分の実践を語り振り返ることによって、自分一人だけでは見えなかった新たな価値を見いだすことができてきた。この大学院では実践のいいところだけを振り返るのではなく、失敗もさらけ出し、なぜこの失敗が起きてしまったのか、その中でも成長はなかったのかを細かく過程を振り返ることで気づけていくものや、他者の実践に自己を移し替えて共感してくれる院生、先生方がいるからこそ、自分が語るという意味をみつけられてきているように感じる。

今年は、木曜カンファレンスという授業の運営に2年目の教職開発専攻の院生と共にあたってきた。冬の集中では、2点についてまとめている。

1点目は、1年目から2年目になって変化していった私たちのコミュニティをまとめてきた。2年間を振り返っていく中で、失敗を繰り返しながら先輩方や先生方に支えられて、この2年目のメンバーだったからこそ1つずつ乗り越え、成長することができたんだと改めて実感した。この2年間で得たものを価値づけながら、最後の1年間に向けて目標を新たに持っていきたいと思っている。

2点目は、自分の授業実践についてである。自分の授業実践を実践後に振り返るが、また時間をあけて再度振り返った時、もしかしたらとまた新たな視点に気づくことができる。そして、この実践を語りながら共有することで、また語りながら振り返ることができ、何度も繰り返し自分の実践を見つめ直すことができる。また、そこで授業についての助言をいただ

くこともできるからである。

この2点を中心に2年目を振り返っているが、この時間だけで終わるものではないとも思っている。解決したように思っている考え方、まだ腑に落ちていない考え方がある。また、答えを見つけたように思っているものもある。これから先、この時間振り返る

ことで終わるものではなく、現時点で考えているものは今後変化していくものでもあると思っている。この時間考えることで終わるものではなく、今の考え方をもちつつ、繰り返し振り返ることを忘れずに、残りの1年間何事にも挑戦していきたいと思っている。

1年前の自分、今の自分

授業研究・教職専門性開発コース2年/附属義務教育学校前期課程 竹内 達郎

冬の集中サイクルでは、これまでの記録を基に長期実践報告書につながる内容をまとめていった。小学校免許取得プログラムで3年履修である自分は、今年度中に報告書をまとめることはなく、来年度に向けた資料作りといった様子であった。

今回のサイクルでは、特に道徳の実践を中心にまとめていった。道徳の実践は、1年目にも実践を行っていたため、その授業の内容と今年度行った実践を比較していく良い機会となった。1年目の道徳の記録を見返してみると、自分の中で不完全燃焼だった部分が多くあった。1年前の自分の中で課題であったことは、価値に対してどのように子どもたちの意見を紡いでいくかという点である。価値項目として「誠実」というものを取り上げ、そこに向けて意見をつないでいく考えであったが、誠実に対する授業者である自分の考えがぼんやりしている部分もあり、子供の意見が画一的なものになってしまい、広がった意見へとつながっていかなかった。各々の意見を箇条書きでまとめたようになってしまい、深い部分まで考えていくことができていなかったことが反省点として挙げられた。

そこを踏まえ、今年度行った実践では、子どもの意見が多く出やすくなるように、子どもたちの立場を示しやすくするメーターをつくり、それぞれの立場の子どもの意見を集約していく方法を行った。自分の中では、大まかに5つの目盛りをつくり子どもに選ばせていったが、子どもの中から、「メモリを増やしていいですか」という意見が出てきたため、より細分化された意見が出てきた。それぞれの立場の意見を出させてまとめていくと、何に重点を置くかは立場によってさまざまであり、価値観を考えていくための材料が多く出てきた。そういった面を考えていくと、1年前の実践と比較すると改善した点であると感じた。

その反面、未だにうまくいかないと感じる部分も

ある。自分が予期していない意見に対する対応の方法である。多様な意見の中に、意図していない意見がいくつかあった。その子どもなりに考えていたものではあるが、ほかの意見とのつながりが薄い意見があり、それに対して自分は軽く流すように対応を行っていた。しかし、授業映像を見返してみると、他の子が疑問に思っているような反応が見られた。そのような疑問を拾って全体に共有していくことで、新たな価値観を生み出すことができたのかもしれない。その意見以外にも、意見をつないでいったりすることができたのかもしれないが、多様な意見を出す段階で止まってしまったものが多かった。まだまだ多様な意見をつないでいく中で子どもの考えが深まっていくような授業は難しいと感じた。このように、1年前の実践や考えをふまえて現在の自分についてまとめていくと、自分の中で変わった点と変わらない点を認識していくことができると感じた。

また、後期に入ると帰りの会の時間を使い、様々な取り組みを行ったため、その記録もまとめていった。例えば、秋休みの思い出を「〇〇の秋」というように一言で書かせ、それについて説明する文を書くという活動を行った。書かせてみると、すぐに書き始める子や、じっくり考えて書く子、書くことが思い浮かばずに相談にくる子など、子どもによってさまざまであった。そのような姿を見た際に、普段の自分が捉えている子どもの姿と照らし合わせる良い機会となった。普段から文章をまとめることに時間がかかってしまう子どもは、やはり、この活動でも、時間をかけてまとめていると感じたり、普段国語などの時間に自分の意見をすらすら書いている子であっても、意外と浮かばずに困っている姿があったりと自分の見方とあっている部分もあれば、また違った側面に気づくことができる機会にもなっていた。参観者としてみる機会と、実践者としてみる

機会、子どもの姿への気づきの違いを改めて感じた。その視点を積み重ねていくことで、授業実践を行った際などに机間支援を行うための一つの基準のようなものをつくることができたり、生かしたりすることができる。そのような視点の変化を振り返る

ことができたということも、今回のサイクルの収穫であると感じた。

サイクルでつかんだ視点やスタンスの変化などをしっかり踏まえながら3年目に向けた自分の思いをより強固なものへとしていきたい。

至民中学校公開研究会報告

学びの再確認

―至民中学校の公開研究会を通して―

授業研究・教職専門性開発コース1年/附属義務教育学校後期課程 澤崎 俊之

11月末、教職大学院の学びの一環として、至民中学校の公開研究会に参加させていただいた。今回の公開研究会では、「協働的な学び」を意識した授業が国語・社会・数学・理科・英語・音楽の各教科で公開され、私は3年生の社会科の授業「福井市がさらに住みやすいまちになるための政策を提案しよう～地方自治とわたしたち～」を参観させていただいた。

参観させていただいた授業は、中学校学習指導要領第2章第2節公民的分野の内容項目「(3) 私たちと政治」の中項目「イ 民主政治と政治参加」の内容に基づく地方自治について扱ったものであった。本単元は中学校社会科の公民分野においては重要度が高い内容の1つで、生徒たちがこれまで学んできたことを総括的に活かす単元でもあった。一方で、本単元は、福井市が取り組んでいる3つのまちづくり(「快適に暮らせるまちづくり」「住みやすいまちづくり」「活き活きと働くまちづくり」)についての内容が扱われており、大人も頭を悩ませながら考えていることを中学生も同様に考えていくため、中学生にとっては非常に難しい内容である。しかし、中学生にとっては非常に難しく、取っ付きにくい内容であったが、本授業においては、生徒自らがまちづくりについて少しでも向き合ってみよう、考えてみようという意欲的な姿勢が見られた。その背景には、自分たちが今住んでいる福井市に関する内容を主に扱ったからではないだろうか。社会科における公民的分野においては、概念的なことを扱うことも多く、生徒たちにとっては馴染のない内容も数多く存在する。それ故に、生活者の視点を取り入れ、生徒の視点で身近な内容と絡めて学習展開を進めていくことは概念的な内容を

含んでいながらも、生徒たちの理解や興味・関心が促される。今回の授業でも、生徒たちにとって身近な「福井市のまちづくり」という内容がメインとして扱われていたからこそ、生徒たちは難しい内容でもあっても「まちづくり」という社会的課題を考えることにチャレンジできたのではないかと考えられる。生徒たちは社会的事象を“我がこと”として捉え、解決に向けてチャレンジする姿から、改めて生徒たちにとって身近な内容を絡めていくことが高度な内容を扱う際でも、学びに向かう姿勢を維持するための鍵となると確認できた。

また、授業では社会科の考える「協働的な学び」として「学習課題に対する話し合い活動」の場が多く設定されていた。これまでの社会科は事実的知識や概念的知識、技能であっても教科書や教室といった「閉ざされた空間」の中での理解に留まることが多かった。このような現状を打破し、事実的知識や概念的知識の理解を深め、技能を獲得していくためにも、授業における「話し合い活動」が欠かせなくなってくる。しかし、ただ単に話し合いの場を授業に多く盛り込めば良いという訳ではない。生徒たちの一人一人の学びが深まるための話し合いの場が必要となってくる。今回の授業でも生徒たちは大人しいため、なかなか話し合うことを躊躇っている姿も見られた。しかし、生徒たちは話し合っていないから全く考えていない訳ではないようであった。生徒たちは一人一人話し合うために頭を働かせてもいるようであった。そのため、話し合いの場でも沈黙の時間も生まれたのではないだろうか。沈黙の時間が長く続いたとしても生徒たちが思考している姿が見られるのなら

ば、話し合いの場を設定した甲斐もある。改めて、授業において話し合いの場を設ける意義を慎重に吟味する必要があると学ぶことができた。生徒の思考を促す場面が、単元の中で総括的な思考の高まりにつながることを、そして、それらを仕組む学習展開の重要性を考える機会ともなった。

今回の公開研究会を通して、自分が日頃から学んできたことを捉え直す機会ともなった。今回、再確認したことをこれからの自分の学びにしっかりと繋げていきたい。

自分の校種と違う研究授業

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校 津野 慎平

11月29日に至民中学校の公開授業研究会に参加させていただいた。最初、授業研究・教職専門性開発コース（以下、ストレートマスターの略であるSMとする。）の2年生がこの研究会に参加することに決めたようだった。私は話を聞いた際に、なぜ参加するのか、何を見ればよいのか分からなかった。特に当時の私は、インターンシップ先の小学校の特別支援学級の授業づくりで、子どもの気持ちが読めず、子どもたちがやりたいと言ってくれる授業が上手くつくれずに困っていた。そのため、小学校の特別支援学級の授業を見たいと考えていたので校種の違う中学校の研究授業を見ても、自分の中でその授業が自分事に捉えられるのか、今後の自分に活かせるのか心配だった。

至民中学校の公開授業研究会の連絡を受けながら、毎週SMの院生で行っている木曜カンファレンスの主担当企画を行っていた。テーマは授業づくりとなり、授業づくりの中で自分が大事にしていることを問い直していこうと決まった。その上で、院生の中で同じ授業を参観し、どこを見たか、なぜその部分を見たのかを語り合いながら深く追究することで自分が授業を作る際に大事にしているものを再認識しようということになった。そこで至民中学校の研究授業を院生全員が見に行くことになっているので、題材として扱うことになった。そのため、私は木曜カンファレンスの題材として、自分が授業づくりに関して大事にしていることを探しに行くという意識で至民中学校の公開授業を見に行くことができた。

私は、木曜カンファレンスの主担当企画とは別の企画の都合で、専門ではない音楽の授業を見させていただいた。生徒たちは、多くの人が見ている中で、少し気にしつつも元気に授業に臨んでいた。ギターの伴奏を、グループごとのテーマに沿って作ろうという授業を行っていた。私が見ていた4人の生徒のグループのテーマは、「やさしい」というものだった。

テーマをもらってから子どもたちは自分なりの好きなリズムを探している様子だった。以下は少しニュアンスが違うかもしれないが、グループでの対話の内容である。「これ（いくつかあるリズムのパターンのうちのひとつを弾きながら）激しくてカッコいいな」「それを使おう」「じゃあみんなで一回やってみようよ」「誰が歌う？」「みんなで歌おうぜ」みんなと同じリズムを弾きながら歌ってみる。ある子が、テーマの紙を見て気づく。「これもいいけど、このテーマにしないとダメだよ」「うーん、俺ら激しいのが好きなんだよな」「じゃあ、激しくてやさしいのはどう？」「うーん、強くてやさしいにしよう」このグループでは、リズムが速いことを激しい、強いという言葉で、リズムがゆっくりとしているものをやさしいという言葉で表現しているようだった。そのため、そのあと作っていた伴奏は、最初に速いリズムのパターンで、後からゆっくりしたリズムのパターンにするという組み合わせにしていた。私はこのとき、子どもたちが自分のやりたいことを、先生のやってほしいテーマに沿わせて調整させているように見えたので偉いと考えていた。

公開授業研究会のあと大学の木曜カンファレンスの主担当企画で見た授業を振り返った。私は、理科の授業を見た先輩の方とグループが一緒になり、それぞれ授業のどの部分を見たかを語り合った。私は、先ほどのグループの中での子どもの発言やそのときの予想される気持ちについての発言をしていたが、相手の先輩は、授業の題材や先生の授業での発問や板書などに関する発言が多かった。このとき、私は相手の先輩に、なぜ授業の題材や先生の発問、板書などを見ていたかを聞いてみると、その先輩は自分の実践の中で、やりたいことと子どものやりたいことをすり合わせたいが、自分のやりたいことを優先させてしまうとのことだった。そのため、すり合わせられる授業をしたいから今後授業を作る自分のために授業

の題材やその中での発言、発問について見ていたとのことだった。

先輩の授業を見る視点を話しあったところで、私の授業を見る視点についても話し合った。私の場合、インターンシップ先での子どものやりたいことが先輩ほど見えているわけではなかった。そのため、私が子どもたちのやりたいことを把握できるようになるために、公開授業の中で子どもたちの発言やそのときに予想される気持ちについて考えているのではないかと話し合った。

公開授業を見た後のカンファレンスでの先輩との話し合いを終えてから、振り返ってみると、授業を見たときにその人の授業で大切にしている部分によって視点が違うのではないかと私は考えた。先輩の発言の中には、子どもたちのやりたいことと授業者のやりたいことをすり合わせたいという思いがある。その思いで、方法を知るために授業の題材や発問について見ている。私は、最初子どもたちがやりたいと言ってくれる授業を作ろうとしている中で、公開授業の中で子どもたちのやりたいと感じるポイントを知るために子どもたちの発言やその気持ちを見ようとしている。先輩と私の授業で大切にしていることは、子どもたちの思いに寄り添うという部分では共

通しているものの、それを達成させようとする方法が違うのではないかと考えた。このように考えているうちに、今回の公開授業研究会を通して、私が授業で大切にしようとしている部分に関して気づけたのではないかと考えている。それを考えれば、最初に抱いた校種の違う公開授業でも自分事に捉えられるのかという心配は、私の授業の中で大切にしようとしている部分に気付けたという成果が得られたことによって、解消されていたように思う。

今まで、私は子どもたちが面白い面白くないか、子どもの思いを尊重できているかいないかという基準だけで授業を考えていたが、公開授業と先輩との話の中で、それだけでは難しいのではないかということも気付くことができた。子どもたちが面白いというだけで授業を進めることができ、それを全て子どもたちの学びにつなげるのは理想ではあるものの、難しいのではないかと、だからカンファレンスの先輩は自分と子どものやりたいことをすり合わせているのではないかと、それだったら授業者と子どもの思いのバランスを考える必要がある。公開授業研究会とカンファレンスを通して、それぞれの思いのバランスという今後の課題も見つけることができたように私は感じている。

長崎ラウンドテーブル報告

長崎から見た自己を振り返る重要性

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市市民中学校 渡辺 頑太

大学院2年目の11月は授業実践・教職専門性開発コース院生の中でも忙しい時期に入と思う(単元での授業実践や長期実践報告の構想のため)。それは研究に向けた実践のための授業や、その実践をもとに長期報告書を書き始める院生もいるからだ。そんな私も単元での授業実践をさせていただいているなか、今回長崎に足を運んだ。

長崎のラウンドテーブルに参加しようと思ったのは、6月での福井ラウンドテーブルでの長崎大学院生との出会いがきっかけであった。その時、福井大学での取り組みとは違うということ話をいただいた。長崎大学での取り組みをより詳しく知り、自分たちの取り組みを同じ院生という立場に開き省察したいと考え今回参加を希望した。

ラウンドテーブルでは、長崎大学の院生と長崎県の教育センターの方、そして長崎県で不登校の子どもを対応している民間の組織「親の会」の方とグループを囲んだ。親の会の古豊さんのお話では教員とは違った立場で、学校に足を運びづらい子どもへ支援を行っていることや、不登校の子どもに対する法律が変わってきていることなどをお話していただいた。また、実際にあった事例をもとに担任の先生になりきり、生徒対応をグループで考える活動(ケーススタディ)を行い、様々なアプローチを知ることができた。

「どんな子どもも強弱はあるものの認められたい部分は存在する。それは大人もそうである。一人でも認めてくれることや心を開くことができる先生がい

るだけで子どもは助けられる。」古豊さんのその言葉で私は一人の女の子を思い出した。その女の子は中学1年生の時に相談室登校となってしまった。私は相談室でその女の子に個別支援を行うようになり、会話することを主に苦手教科の学習支援を行っている。彼女とは好きな小説やアニメの話を多くしていて、私が来ると笑顔になってくれることが多くなった。彼女にとって私も心を開くことができる先生になれていたのではないかと振り返った。また、私が支えになっている生徒はどのくらいいるのだろうかということも頭を過ぎった。

私の報告では福井大学教職大学院の取り組みを話し、他大学や法人からの客観的視点をいただいた。グループにいた長崎大学院生の話から長崎大学との取り組みとの違いを知った。特に長崎大学の教職大学院では、週1日の実習を何週か行うので実習先との関わりや立ち位置がとても難しいとおっしゃっていた。週3日以上実習を行う私でも、生徒や教員とのやり取りや学校での出来事に遅れをとってしまう。現場との結びつきを改めて見直すことができた。また、附属と公立のどちらも実習を行えるというのは長崎大学大学院の強みであると感じた。私は教育実習とインターンシップをどちらも公立中学校で行っている。附属での実践を本や研究会でしか知らないのも、日常的な様子の観察や授業実践を附属の小・中学校等で行ってみたいと思った。

そういった他大学の実践から福井大学の課題を実感したことがあった。それはインターンにとらわれ過ぎている部分があるということだ。課題等に理論的部分が足りない、実践と理論の結びつきが弱いと

私は思う。木曜カンファレンスや月間カンファレンスでの理論を確固たるものにしていかなくてはいけない。

2日目は長崎大学大学院の実践報告となるポスターセッションに参加した。そこでは長崎大学院生（ストレートマスターと同じような立場）の発表を見学した。どの発表も研究テーマや研究に対する知識とその知識を用いて実践に取り組むという過程が明確であった。私が参観した発表では、「中学校理科において科学的な思考力を育てる授業デザイン」について話していた。科学的に探究する活動には新学習指導要領で必要とされる思考力が必要であること、その思考力を育むために生徒に熟考する場の提供や計画的な思考の組み立てが必要であることを示していた。私の今までの実践を振り返ると手順を踏み、狙いにあう授業デザインができていたのかをもう一度問いただす機会となった。

最後にこれからのことについて書いておこう。私は長期実践報告書のテーマとして「批判的思考（クリティカルシンキング）のあるコミュニティについて理論を形成する。（仮）」を考えている。自分の思考を多面的・客観的に判断できる力の育成と実践（授業や部活指導、大学院での学び）を照らし、私の教員生活の基盤を作り上げたい。そのためにもじっくり思考できる環境や雰囲気づくりをコミュニティと授業の二面から考察と振り返りを行い研究したことを書いていく。その中で自分の学びを見つめ直す（省察）という視点を今回の長崎での教育フォーラムに参加により得て、少し道が開けてきたように感じる。武器はそろった。あとは自分と向き合うだけだ…。

長崎と福井の学びのシステムの相違

授業研究・教職専門性開発コース2年/附属義務教育学校前期課程 新谷 輝

11月中旬に、長崎大学で開催されたラウンドテーブルに参加した。私にとっては、初めての県外ラウンドということで、「どういった人たちが参加するのか」という緊張に加え、当日の発表が控えていたこともあり、「私がやってきたことがどう見られるのだろう」という不安もあった。福井大学教職大学院という肩書のもと、他の大学で話をするのだから、よりたくさんのかんことを吸収して帰りたいという気持ちをもって臨むことにした。

初日は、クロスセッションを行った。福井大学で開催されるラウンドテーブルと同様、いくつかのグループに分かれて、これまでや現在行っている実践

について語り合った。私は、1年目のまとめを中心に、自分の見てきた視点や取り組みを発表した。

しかし、クロスセッションを行う中で、福井と長崎の学びのシステムの違いに驚かされた。積極的に授業実践や子どもたちとの関わりを行い、自分たちの中に経験値を蓄積すること、そこから、自分たちの中に理論を形成していくことが重要視されてきた福井とは異なり、長崎で求められていたのは、いかに既存の理論を基に自分たちが実践を行ってきたかということであった。クロスセッションの中で、長崎大学の先生や学生がしてくださった質問には、「このときの実践で特に気をつけていたことは？」

や「どんな理論を前提にこの働きかけを行ったのか」という自分たちが専門として取り組んできたことに関するものが多く、具体的な理論を基に実践を行ってきたわけではない私にとっては、とても勉強になることが多かった。

2日目は、ポスターセッションである。長崎ラウンドでは、学生一人一人が、ポスターを作成して発表を行っていた。私は、初日のクロスセッションで同じ班であった石田院生のポスター発表を見せていただいた。石田院生は、キャリア教育のことを研究されており、実際に学級活動の中で行った実践を発表してくださった。「マズローの欲求階層説」や「構成的グループエンカウンター」を基に、現場の

子どもたちの実態把握や授業実践をされていたことは、とても素晴らしいもので、自己流で実践を行ってきた私にとっては、とても刺激的な実践と発表であった。

さらに、長崎大学の学生の方々と接してみて、とても印象的だったのは、“話す力”が確実に身につけているということである。大勢の人の前で1人でポスター発表を行うという精神力もさることながら、私たち外部の人間の話を聞くときの姿勢も、話している側から見て、とても話しやすい環境をつくってくれているように感じた。こうして、人と接するという点でも改めて勉強させていただいたラウンドテーブルであった。

静岡ラウンドテーブル報告

立ち止まって、振り返ってみた

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 谷口 貴一

県外でのラウンドテーブルも今回の静岡を含めて3回目となった。県外でのラウンドテーブルは毎度、県外の先生方の新しい視点からコメントやアドバイスを頂くことができ、改めてインターンシップやカンファレンスの重要性を感じることができる機会となっている。今回の静岡ラウンドテーブルでも、これまでの大学院での取り組みに改めて価値を感じることができた。静岡ラウンドテーブルを終えて私が改めて気づいたことを記す。

長期実践報告書の執筆直前だったため、私の大学院での3年間の学びを報告することにした。報告資料を作成するために、インターンシップとカンファレンスの2つの学び場での3年間の取り組みを図にしながら考えた。そうすると、1年目のインターンシップでの経験が、私の中で3年間を通した軸となっていることが見えてきた。1年目の熱心に子どもの声に耳を傾ける先生の姿や互いの考えから学び合っていく子どもの姿がある授業を追い求めながら2年目、3年目の実践を展開しており、それが今後においても大事にしていかなければならないことだと改めて感じた。カンファレンスにおいては、長い時間をかけて実践を言葉として発信していくことの意味や価値に気づいていった自分が見えた。1年目は実践や自分の考えていることを言葉にすることが苦手であった。しかし、同じように悩みながら言葉に

しようとする院生や丁寧な聴き役となってくださった先生方に支えられて、実践や自分の考えを言葉にすることを続けてこられたことで、少しずつ自己の実践を言葉にする意味や長い視点で実践を捉え直すことの大切さを感じることができるようになってきた。このようなことを資料にまとめ、報告した。今回報告の時間を頂けたことで、改めて自分の3年間の学びを整理することができた。

上記の報告を聞いてくださった先生方からは、実際に教育現場に3年間も入って学ぶことができる環



境やインターンシップだけでなくカンファレンスでお互いを刺激し合いながら子どもや学級を見る視点を育むことができる点が良いとコメントをいただいた。よく県外の教職大学院と比べると、福大の教職

大学院のやり方は特殊だと言われることが多いが、私はその特殊なやり方で学ぶことができてよかったと感じる。3年間という長い時間の中で、時間をかけて子どもや先生方と関わり、そのことについて同

じ院生や現職の先生方と語り合うことで、決して一人では得られなかった学びを得ることができた。このような大学院での学びを長期実践報告書として残し、何十年後かの自分への贈り物としたい。

静岡ラウンドテーブルを終えて

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市明新小学校 山崎 洸亮

12月15日に行われた静岡大学のラウンドテーブル（以下「静岡ラウンド」）に参加した。昨年他大学のラウンドテーブルに参加して感想を述べていた先輩が「行ってよかった」と生き生きと話されているのを聞いて、他大学のラウンドテーブルに行かなかった私は「行っておけばよかった！」と後悔していた。

静岡ラウンドでは80名程度の参加者がいて、中でも県外からの参加者はそのうちの1割程度だった。人数だけで考えればアウェーだったのだが、気候も人柄もあたたかく、様々なアドバイスをいただいたり楽しい会話をしたりできたので、私自身が昨年の先輩のように「行ってよかった」と思うことができた。（唯一の心残りを挙げるとすれば、静岡を訪れたのにも関わらず富士山をしっかりと臨むことができなかったことくらいだろうか。）

私は最初の報告者として、自身の教職大学院での2年間で培った学びを木曜カンファレンス・インターンシップの両面からの観点で報告した。主にコメントをいただいたのは「子どもを叱ること」についてだ。私は「もっと子ども達に注意して」とインターン先で過去に言われたことがあり、頭ごなしに威嚇するように注意することが叱ることだと勘違いしていたことがあった。そのことについて話すと、同じような経験をされたことのある小学校の先生が、「そんなことも言われたけど、いつしか子どもを見て『叱る』を考えなくなると、この子に『どうしてあげたらいいか』を考えるようになった。」と仰っていた。また子ども園の園長先生からは「幼稚園では『この先生が大好き!』と思ってもらえるように信頼関係を作ることからスタートする。注意する時も、なぜここで注意するのかを伝えることに気を付けている。」というお話をいただいた。私はこれまで教師としての行為ばかり気にしていたように思うが、今係わっている子ども達と何気ない会話をもっと増やすことで信頼関係をさらに築き、叱るという行為に頼らず伝えるべきことは伝えていきたいと改めて感じさせられた。

次に、こども園の園長をされている先生からの報告があった。30数年の経緯から、「なぜ保育者を続けられたか？」というテーマで報告がなされた。その答えは一言で言うと「人とのつながり」であるという。お話の中には、勤務される園の先々で自然に触れ合う取り組みや地域のお年寄りの方と触れ合う取り組みを様々行われていて、地域との協力や助けのあたたかさを報告からひしひしと感じた。報告と報告の間に行われたミニ講演では、日本ユネスコの「ESD（持続可能な開発のための教育）」についてのお話があったのだが、ESDは静岡全体で精力的に取り組まれており、先生もそれに絡めてお話して下さった。幼稚園だけで取り組むものではなく、小学校、中学校と連続的、発展的に取り組みが考えられており、連携・協力という意味でも一貫した指針が常に意識されていることは素晴らしいと感じた。また、こども園の幼児の活動では「やりたい!」という気持ちを伸ばすような活動が行われている。これが主体的な教育そのものの姿なのだろうと感じた。小学校でもその姿を大切にしたいと思う。

最後に、私のグループには現職の先生方が多かったので、私の報告の後、「残り3ヶ月余りで教員になる私にアドバイスをください」とお願いした。すると、出会って1時間ほどしか経っていないにもかかわらず、私のことを見透かしているかのようなアドバイスや激励をいただいた。

- ・学部生からそのまま教師になる人もいる中で大学院進学という選択をとるなら、大学院での学びをプラスに考えられるように私も捉えていきたい。

【静岡大学の学部生より】

- ・子ども達の学力の底上げができるように得意な科目を1つ持つといい。教師になっても大学に時々戻って近況報告をしてほしい。【静岡大教職大学院の先生より】

- ・子どもや学校がこうなったらいいなという姿を描きながら教員生活を過ごしてほしい。【小学校の先生より】
- ・①健康であること。②子どもに聞かせる話は手短かに。③ワークライフバランスを大切に（適度に楽しいことをした方がいい）。④前始末（何か起きる前に手を打つ、早めに上司に報告する など）の思考を大切に。【中学校の先生より】
- ・熱っぽく子どもに向き合う。小中学校ではテストがあつて結果・手ごたえを求めてしまうが、「何の力を〇年後までにつける」という考えが大切。「この先生でよかった！」と思ってもらえるように頑張る。【こども園の園長先生より】

固く考えて自分で自分を追い込んでしまう私に対して、「健康第一」「適度に楽しいことを」というアドバイスがあつたのにはクスッと笑ってしまったが、長く教師生活を続けたり、魅力的な教師になるにはどれも蔑ろにはしてはいけない大事なことだと思った。このようなアドバイスを最後にいただいたことも含め、改めて静岡ラウンドでの出会いに感謝したい。



つながりの中でいきる

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井市中藤小学校 松木 巧

■初めての静岡ラウンドテーブル

実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2018 に参加した。静岡に来るのは確か高校生の時、部活で来た時以来2回目だ。

ラウンドテーブルには、名簿を見る限り78名が参加しており、ほとんどが静岡県内からの参加者のようだった。オープニングセッションの後、1グループ6人に分かれて報告になる。私のグループは、私の他に特別支援教育に携わってきた小岱先生が報告することになっていた。そして、ファシリテーターとして岐阜大学から長谷川先生、聞き手として附属幼稚園の青山先生、大学生で特別支援教育専攻の友田さん、幼児教育専修の長谷川さんという構成だった。特別支援教育と幼児教育は親和性が高い。特別支援学級での実践を話そうと思っていた私にとって、とても話しやすそうなグループだった。

■私の報告について～ファシリテーションって、大事～

私は教職大学院での学びとして、主に2つのことを報告した。1つは、インターン先の特別支援学級

で行動の背景を探りながら読字や書字の学習支援をした話。もう1つは、週間カンファレンスの企画運営をする中でファシリテーションについて考えていたら、教員生活の様々な場面で必要な力だと気づいたという話。報告後、話題は後者のファシリテーションについてのものになった。



青山先生は、幼児教育では協働的な学びが重視されていることを挙げ、まず教える側の教員が協働できるべきであり、そのためにはファシリテーション

のスキルを培っておくべきだと仰っていた。また、小岱先生は教員全員がファシリテーターマインドをもって働くことで、話し合いがより効率的に進められると仰っていた。長谷川先生は、教員は『文脈依存の仕事』であり様々な人間関係の中で働くので、背景を考慮することは教員として色々な関わりの中で大切になると仰っていた。友田さんは、グループワークが上手くいかないことに悩みがあり、行動の背景を探ることや、ファシリテーターの役割について共感してくれた。

どの方も私の報告に共感したうえで意見を出してくださるので、とてもよい雰囲気で聞くことができた。教員全員が場に応じてファシリテーションができれば、学校内外での話し合いも充実しそうだ。そうした話し合いの経験があると、実感を伴って子どもたちに話し合う力を培う活動が考えられるようになるのではないかな。会議は司会が進めるものではないと常々考えてはいたが、ファシリテーターは1人だけでなくでもいいということにはっきりと気づくことができた。院生の会議の際、誰がどんな役割で参加しているのか、私は構成員にどんな働きかけができるのかについて、もう一度考えてみたくなった。

■小岱先生の報告について

小岱先生からは、自身の教員生活を振り返り、校長として赴任した2つの特別支援学校での取り組みについて話した後、今後の学校が取り組むべき課題についてお話いただいた。

どのお話も魅力的で、あっという間に報告の40分が経っていた。ラウンドテーブルに行くと、いつも時間を忘れさせる先生の巧みな話術に惚れさせられる。1つひとつに感心していたが、そのどれもに共通していたのが地域に学校を開くことだった。そしてその土台には多様性を柔軟に認める意識があったのだと思う。

特別支援学校では、地域での清掃活動や販売活動をしたり、地域のお茶業者さんと茶摘みを経験した

りしていた。このように学校として地域に開いた活動にたくさん取り組むことは、地域と子どもたちとの相互理解を促し、結びつきを強くしていくことができる考えた。

小岱先生は小学校学習指導要領の総則を挙げ、子どもたちを取り巻く環境が複雑になっているからこそ、学校だけでなく地域や社会に開かれた教育課程が大切なのだと仰っていた。子どもの教育は学校だけで行うことではない。家庭や地域の理解や支えが必要だ。これらを得るために地域での活動を積み重ね、少しずつ互いのつながりを開いていったのだろう。つながりを得ようと思うなら、まずはこちらから開くこと。理解してほしいければ、まずは相手を理解すること。その上で、互いにできることを考えていく。そうすればきっと、多様性は認め合えるようになるだろう。

■つながりの中でいきる

今回のラウンドテーブルで、教員は人とのつながりの強い仕事だと感じた。様々な人がいる。そんな人たちの多様性を柔軟に受け止め活かす意識をもって、行動の背景を探る。それが授業や話し合いの場でファシリテーションをすることに結びつく。『つながりの中でいきる』教員として、人とのつながりを生み出すこと、そのつながりを活かすことについて、改めて考えることができたラウンドテーブルだった。



東京ラウンドテーブル報告

這い上がり続ける

—省察から持続可能なコミュニティづくりへ—

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校

佐藤 琢磨

「どん底に突き落とされ、崖を這い上がって来たのですね。そのことを書いてください。」

昨年末に参加させていただいた東京ラウンド（以下「東京 RT」と表記）で頂いた一言だ。振り返ると、どの方の報告にも必ず迷いや悩みがあった。その道のりは、崖を這い上がってくるように、再構成し続けた過程だった。上の一言は、私の3年間に就いて拙い報告を聴いていただいた後、アドバイスとしてもらった言葉である。

東京 RT には毎年、社会教育に携わる方々が来られる。学部生時代に市民 NPO 団体に入り、市民活動やボランティアに参加し関わっていたこともあり、M1 の時にも参加した。長期インターンシップと大学院でのカンファレンスが大きな学びの場である私にとって、社会教育に携わる方のお話を聞けることはとても新鮮だった。市民の声から始まる活動はどれも情熱的で、エネルギーが満ち溢れていた。今年も変わらない熱気を感じた。

M1 の時は皆さんの報告をただ聴くだけだった。しかし今年は、自分の実践と重ね合わせながら聴くことができた。そして、個人や組織で実践を省察し続けることで、持続可能なコミュニティが生まれるということを学んだ。

東京 RT は2日間にわたって開催された。初日はシンポジウムがあった。「社会教育士」の資格取得のために設定された社会教育実習の意義と課題について、受け入れ先と実習者の方の報告を基に考えた。学部生の方は実習を通して、現場の楽しさや社会教育の意義を実感し、大きく成長されるそう。また、利用者の方や受け入れ先の職員の方にとっても良い刺激になるとのことだった。社会教育実習は、教育実習のようにシステム化され、「どこでも同じように行われる」わけではない。地域のニーズや実習者の実態を踏まえ、柔軟に行われている。一日の実習について、受け入れ先の方と実習生とが共に振り返り、次に挑戦すべきことや課題が見えてくるのだそう。思いに沿って柔軟にメニューを組

めることは課題であり、また良さであると感じた。

2 日目は、グループに分かれお互いの実践を振り返り、語り合った。

今私は、教職大学院における3年間の学びの集大成である長期実践報告書を執筆している。振り返ると、私の学びは「みんなの授業じゃありませんでした」という子どもの感想に打ちのめされたことから始まった。伊那小の総合学習に衝撃を受け、仲間や先生に助けられ、授業改造に取り組み続けた3年間だった。そんな私の報告をグループの皆さんは温かく聞いてくださった。「学校は窮屈な所だと思っていたけれど、今でも子どもにとって大きな学習の場ですね。そこでどのようなコミュニティや学びをデザインするかが大事ですね。」という一言をいただけて、とても嬉しかった。

同じように、社会教育主事として、5年間にわたって研修をリードされてきた先生の報告を聴いた。また、大学の講義で、選挙のポスターづくりを通して、選挙に関心を持ってもらおうと、行政とタイアップして活動されてきた学生さんの報告を聴いた。

語り合いながら、グループで省察することの意義を考えた。学習や組織や個人にとって、サイクル状に続いていくものである。学習の道筋を振り返った時、次なる課題や目標が見えてくる。社会教育主事の先生は、毎年職員の方と協働して実践記録を書かれていたのだそう。実践記録を書く中で「そもそも自分の活動は……」と、自分たちの活動の意義を捉え直しながら、次のステップに向かっていったのだそう。私自身、教職大学院ではお互いの実践を省察し合い、次の課題を見出しながら学び続けてきた。次の課題が見つかることで、自分にも組織にも目標が見つかり、またあきらめず粘り強く挑戦し続けることができた。

これまでの私は、省察とはただ自分のために行うものだと考えていた。省察の意義を話し合ううちに、自分の考えの浅はかさに気付かされた。省察とは自分にとっても組織にとっても、次なるステップ

を見出すために行うものなのだろう。組織の中で省察し、学び続けることで持続可能性が生まれてくる。学校づくりや市民活動であれば、多世代の方を巻き込みながら、コミュニティの持続を図ることができる。

教員になったら、学校や、できれば地域の中で RT のように実践を語り合い、省察する場づくりをした

い。学校だけを学びの場にするのはもったいない。地域には多様な学びの場がある。互いの実践を語り合うことで場が拓かれ、子どもの学びはより豊かなものになっていくのだから。

最後に、東京 RT でお世話になった全ての方に感謝を申し上げたい。2 日間、本当にありがとうございました。

“人を育てる”ということ

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校 家高 里佳

先日、東京学芸大学にて行われた実践研究 東京ラウンドテーブル 2018 に参加した。一日目のシンポジウムではまず、2020 年度より社会教育主事養成課程において「社会教育実習」が必修になる点、また課程修了者には「社会教育士」という称号が与えられるようになる点が事実として確認された。また、実習を通して考えるというサブテーマのもと実践者として、実習を受け入れている方と実習生の講話も聴くことができた。それらを踏まえて「社会教育士」の養成と期待される役割についてグループで話し合うこととなった。私たちのグループでは、

“一週間程度の実習に何の意味があるのだろうか”

“そもそも実習を受け入れる体制が整っていない状態で必修化して、質の保証ができていない状態にもかかわらず社会教育士たる称号を与えるのはいかなものか” “実習によって何が得られるか、何のために、何をするのか等、明確な基準は定められていない状態で大丈夫なのだろうか” 等、実習科目を必修化する必要性や、実習の質の保証に関する懸念、社会教育士という称号の是非に至るまで、制度上の変更に対する不安の声が多く聞かれたように思う。実習という点で教育実習が引き合いに出される場面があり、きっちりと明確な基準が設けられていないと水準が保てないという話題につながっていた。他のグループでも、私たちのグループと同じような内容が挙がっていた。制度に対する不安は数多く聞かれたが、参加者の皆さんの心には何よりも“学生を育てていくためにはどうしたらいいか”という思いがあるように感じられた。社会教育関係の参加者の

皆さんの、人を育て、地域を育て、より良い社会を築いていこうという心意気を強く感じた場面であった。

二日目には、自身が報告者として実践を語り様々な視点を頂くことができた。中でも、“必要性” “ケアする人をケアする” “何に気がかっているのか” 等、私が悩んでいることの根本を見つめなおさせてくれるようなキーワードを得ることができたことが収穫であったように感じる。現在 1 年のまとめの執筆を進めている最中であり、自分自身の実践を他者に語る場をいただけたことは大変学び深いものになったように感じている。

今回本ラウンドテーブルに参加することを決めるまでは、恥ずかしながら私には社会教育についての知識が全くなかった。しかし、この参加が決まったことがきっかけとなり、社会教育について知りたいという意欲に駆られた。調べてみると、社会教育士がどのような役割を担うのかということや、学校教育と社会教育がどのような関係を築いていくべきなのか等、教員を目指す自身にとって大変興味深い内容が記されていた。まだまだ本で知識を得るだけで机上のみの段階ではあるが、これから実践の場で学校教育を担うものとして主体的・対話的で深い学びを実現していくためにも、社会教育との協働・協治を大切にしていかなければならないのだと感じている。本ラウンドテーブルに参加したことは私にとって新しい視点を与えてくれた。このような機会を頂けたことに感謝し、これからの実践に生かしていきたい。

「ともに学び合う」大切さ

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市明新小学校 山岸 千尋

寒さが本格的になってきた今日この頃、私は昨年
に引き続き東京ラウンドテーブル（以下「東京 RT」
と表記）に参加させていただいた。東京 RT には毎
年、社会教育に関わる方々が参加される。1 年目は
ただただ報告を聞いているだけだったが、社会教育
という視点からのお話はとても新鮮だった。特に、
「学校教員にこそ公民館での取り組みや子どもの様
子を知ってほしい。」という参加者の言葉が印象的
だったため「今年は学校現場と社会教育のつながり
を見つけて自分の実践のヒントにしよう！」と考え
た。

東京 RT は、12/22, 23 の二日間にわたって開催さ
れた。1 日目は、ポスターセッションとシンポジウ
ムが行われた。ポスターセッションでは、勝山公民
館嘱託主事の方の実践と“得る”Cafe サイト（皆の
生活を豊かにするためのソーシャル情報のメディ
ア）についての発表を聞いた。勝山公民館では、福
井しあわせ元気国体に向けて勝山高校と連携しては
ぴりゅうのマスコットづくりをしたり地域のボラン
ティアの方々と協力したりとさまざまな取り組みが
あることを知ることができた。私は、「公民館」と
聞くと小学生のときに子ども会で利用した記憶しか
ないが、同じ福井県（の公民館）でも地域や学校、
家庭とのつながりを大事にしながら公民館の役割を
考えていることを知って感銘を受けた。

“得る”Cafe サイトでは、日本青年館発行の「社
会教育」誌と連携し皆の生活を豊かにする活動をし
ている人、団体、イベント情報を発信しているそう
だ。まちづくり、地方創生、子ども・子育て・若
者、シニア、ダイバーシティ・多文化共生、文化・
芸術、スポーツ・健康、SDGs・環境・防災、キャリ
ア教育、ICT、CSR など幅広いジャンルで情報発信を
行っている。地域を取材するレポーターも募集して
おり、会いたい人に会ってインタビューできたりイ
ベントに参加したりできる。実際の学校現場で教員
とともに授業を作ったり講演を行ったりもしている
そうで、学校現場以外でも自分が授業で活用できる
ツールが増えてきていることを実感した。

シンポジウムでは、東京都内で社会教育実習を受
け入れている施設職員や実習生の報告から社会教育
実習そのものの意義や課題、身につけることができ
る力について考えた。2020 年度から社会教育士養成
課程の科目が変更され、社会教育実習は必修となっ
た。しかし、社会教育実習は、教育実習のように実

習内容が決まっているわけではないため「どの施設
でも一定のレベルで実習ができるとは限らない」と
いう課題があるそうだ。それでも職員の方々は実習
生がどんなことに興味があり、どのような実習をし
たいかというニーズに合わせて実習内容を決める、
ともに振り返りをするといった工夫をしていること
が分かった。

次世代の社会福祉士を育てるために、ともに学び
合い成長していくことは学校現場でも求められるこ
とだと感じた。

二日目は、少人数のグループで実践を伝え合っ
た。東京ラウンドテーブルは比較的小規模で、私の
拙い報告にも真剣に耳をかたむけてくださる方が多
かったので話しやすい雰囲気があった。その中で
も、なかの生涯学習サポーターの会の方の「バリア
フリーマップ作り」の実践が印象に残った。バリア
フリーマップとは、地域のバリアフリー対応状況を
記した地図のことである。地図を作る前に「歩道の
段差は 2cm、スロープの傾斜は 4 度あると車いすで
は越えられない」「コンビニも引き戸だと車いすの
人にとっては利用しづらい」などといったことを座
学で学んだとおっしゃっていた。また、実際に外に
出て傾斜計で坂の角度を測ったりメジャーで道幅を
調べたりして 1 年かけてバリアフリーマップが完成
したそうだ。そのバリアフリーマップも頂いて見て
みたが、いたるところにバリアフリーの対応状況が
細かく記されていた。報告を聞いて「学校でも国語
や総合でバリアフリーについて学ぶことは多いけれ
ど、私でも知らないことがたくさんあったから授業
でもこのマップは生かせると思いました。バリアフ
リーについてよく知る団体の方々と連携することも
できそうですね。」と言うと、「授業するときには
是非、講師として呼んでください」とおっしゃって
くださった。

東京ラウンドテーブルに参加して、学校教育と社
会教育の意外なつながりが見えた。学校現場の中
でも校種・世代を問わず、ともに学び合うことが大切
だとされているが、社会教育、地域、家庭などさま
ざまな職種の方とともに学び合うことも大切にしたい。
私は、あと 3 か月で教壇に立つ。そのときに学
校内だけでなく、外の世界に目を向けて誰とでもと
ともに学び合うことができる教員になりたい。

赤塚第二中学校ラウンドテーブル報告

赤二中 RT を通してみえた、これからの私の展望

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市明新小学校

浅島真言

2019 年が始まり、もう 1 ヶ月が過ぎた。年齢を重ねる度に、本当に時間が早々と過ぎ去っていく。昨年度、赤塚第二中学校（以後、赤二中と記す。）ラウンドテーブルに参加した。あれから、もう 1 年。本年度も、昨年同様に、引き続き参加させて頂いた。

昨年度のラウンドテーブルでは、主に、公開された授業 1 時間を通して生徒たちがどのような学びをしているのかに視点があてられ、勉強させていただいた。まだ、昨年の事はよく覚えている。私が 1 時間追いつけたグループでは、誰ひとり活動において、受動的な姿がなかった。それは、単に話を進める生徒や書記をする生徒だけでなく、実は口数が多い生徒も同じであった（詳しくは、教職大学院ニュースレター No. 107 号を参照のこと）。昨年度は、そうした主体的に学びに向かう生徒がたくさんいてすごいと、そこまでの考えだった。こうした生徒の姿がどうして現れているのか。そうした赤二中の教育の在り方とはどのようなものかという視点がなかった。本年度、M2 になってそうした子どもたちを育む教育についての視点を持って、学びを得たいと考え参加させて頂いた。

本年度は、社会科の授業を 1 時間参観させて頂いた。授業を通して、なぜ子どもたちが主体的に学びに向かえるのかを考えた。授業は、「外国生まれのオーストラリア人の出身地の内訳」を示した棒グラフから、グループで問いを作るといったものだった。私はあるグループの 1 時間を追ったのだが、多数の主体的な生徒の存在に隠れ、少し受動的な生徒の姿もみえた。その生徒は、グループを解いて、他のグループの問いに答える時には、表情が晴れて主体的な姿が見えた。その表情の側には、仲の良いと思われる友達の存在があり、明るく前向きに取り組

む姿があった。なぜ、グループ活動では、暗く受動的であったのだろうか。仲の良さと主体性は変わってしまうのか、と疑問に感じた。

そうした様子をラウンドテーブルで、お話をしてみると、「発信する力より、まず受信する力ですね。」という会話が生まれた。私自身も、自らの話を聞いてくれるという安心感があれば、話してみようという気持ちが生まれると思ったし、こうした会話そのものも、私の話を受信してくださっている先生たちが作っている温かい雰囲気こそが生んでいると思った。そう思うと、あのグループでは、受信する側が一人の生徒を受け止めきれていなかったのかもしれないと考える。しかしながら、授業を通してみえた教室では皆明らかにどの場面かにおいては、主体性があった。赤二中の教育において、主体的な生徒がたくさん存在しているのは、学校として話を聞いてくれる教師や仲間がたくさん存在しているからではないかと考える。

私は、これから小学校で教員になる。今回、赤二中ラウンドを通じて、小学校段階で児童同士が誰とでも関わり合える良さや、仲間と関わり合ったことで得られる達成感など、仲間の良さをたくさん体験できるようにしていきたいと考えた。思春期を迎える中学生であっても、誰とでも関わり合える喜びを知っている素敵な「人」であるように教育にあたりたいと、これからの展望を見据えるきっかけになった。

最後に、校長先生、副校長先生をはじめ、授業を参観させて頂いた岡部先生、ラウンドで一緒にさせて頂いた名地先生、斎藤先生、浅井先生、そして何よりたくさんの学びの答えを見せてもらった生徒の皆さんに感謝を申し上げたい。

本当にありがとうございました。

福井大学総合研究棟 V (教育系 1 号館) / 総合研究棟

編者 藤田静雄 監修 藤田静雄 監修 藤田静雄

2/16_(sat)

13:00-17:40 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A

21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

－ 協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す －

これまでZone A では、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル2019 SpringSessions では、「専門職の学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）」のビジョンにもとづき、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」という新しくもあり核心的なテーマを打ち立て、学校が「専門職ネットワーク」と「学校ネットワーク」を編み込みながら、学び合う文化の生成と成熟を進めるための道しるべを参加者のみなさまと協働探究していきます。

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション）

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

シンポジスト	福井大学附属義務教育学校・副校長	牧田 秀昭 氏
	埼玉県立豊岡高校・教諭	金子 奨 氏
	東京大学大学院教育学研究科・教授	秋田 喜代美 氏
モデレーター	福井大学連合教職大学院・准教授	木村 優 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム 協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す

Session II の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。

Zone B1

これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う

- 教師になりたい人が育つ世代継承生成サイクルを創る -

大学入試の地域枠と高大接続／地域に密着した教育実習／5年制教員養成の構築／教員研修とリンクした教職大学院の教育課程／管理職希望者の全てが入学できる教職大学院。こうした教師の生涯発達課題を実現すべく地域社会と教職大学院が動き出した。

教育の振興なくして地方創生はありえない。地方が秘めている教育振興の仕組みこそ、知識基盤社会に立ち向かわなければならない日本が、世界に向けて発信できるかけがえのない世界戦略である。近年、日本型学校教育が注目されるが、その根底には地域と一体となって教師を育てる仕組みが息づいている。私たちは風化しつつある地域の教師教育の仕組みを活性化し、そこに秘められた子どもたちの **Agencies** を育む教師の有様、さらには、子どもと教師の **Inter-agency** を育む仕組みを顕在化させなければならない。

これらの課題を実現するには、何が必要なのか。教職大学院の現場、国の教育行政、地域社会の各立場から建設的な意見交換を実現する。

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション）

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う

シンポジスト	岡山大学大学院教育学研究科長	三村 香里 氏
	文部省総括教育政策局教育人材政策課長	柳澤 好治 氏
	福井県教育庁教育政策課長	片柳 成彬 氏
	敦賀市教育長	上野 弘 氏
情報提供	福井大学連合教職大学院研究科長	松木 健一 氏
コーディネーター	福井大学連合教職大学院院客員教授（慶応大学・東京大学教授）	鈴木 寛 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム

教師になりたい人が育つ世代継承生成サイクルを創る

Session II シンポジウムでの議論を受けて、参会者の皆様とともに協働チームで問いと議論を深めていきます。

話題提供

文部科学省総括教育政策局教育人材政策課教員養成企画室教職大学院係	東 尚平氏
文部科学省総括教育政策局教育人材政策課教員養成企画室教育大学係	山中啓資氏
大阪体育大学准教授	岸田 正幸 氏
福井県総合教育研究所所長	牧野 行治 氏
若狭町教育長	玉井喜廣氏
福井県立若狭高等学校進路指導主事	澤村 文明 氏
福井県立敦賀高等学校進路指導主事	高橋 克弘 氏

Zone B2

学部一大学院を通じたこれからの教員養成を考える

実践を聴き、夢を語る

これまで Zone B2 では、大学教員が自らの授業実践を語り合い、聴き合うことを通じ、これからの時代に求められる教員養成のあり方を模索してきました。その中で、学校現場等を活動の場とした多様な実践的活動の有り様とその成果、課題等が浮かび上がってきました。昨今、教員志望の学生に対する継続的な現場体験の充実・拡大が求められています。また、学校現場における実践的活動は、教職大学院と修士課程の一元化における重要な柱の1つであるともいえます。しかし、継続的な現場体験の実現と継承・発展を支えることには様々な困難が伴います。そこで、今回のラウンドテーブルでは、学校ボランティア、サービス・ラーニング、体験実習等の実践的な取り組みに焦点を当て、教員養成における体験的活動をいかに実現し、継承・発展させていくのかについて、互いの実践を交流し合いながら、参加者のみなさまと探究を深めていきたいと思います。

Orientation	13:00-13:10	オリエンテーション
Session I	13:10-14:10	ナレッジ・フェア（ポスターセッション）
Session III	14:20-15:50	シンポジウム

学部-大学院を通じたこれからの教員養成を考える

「教員養成・研修統合型のシステム構築の展望と課題～大学の役割から考える～」

静岡大学 梅澤 収 氏

「教育問題に対応する実践的な力の育成を目指した『1000 時間体験学修』」

島根大学教育学部 下村 岳人 氏

コーディネーター 福井大学連合教職大学院 遠藤 貴広 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム 実践を聴き、夢を語る

梅澤 収 氏（静岡大学） 大畑 健二（信州大学教育学部附属長野小学校）

小田切 亮 氏（信州大学教育学部附属長野小学校） 小野瀬 善行 氏（宇都宮大学）

竹内 克紘 氏（信州大学教育学部附属長野小学校） 下村 岳人 氏（島根大学）

白井 敬 氏（信州大学教育学部附属長野小学校） 田宮 縁 氏（静岡大学）

長谷川 哲也 氏（静岡大学） 肥田 武 氏（一宮研伸大学）

三品陽平氏（愛知県立芸術大学） 福井大学

小グループ形式での実践交流を行ないます。

Zone C

持続的なコミュニティをコーディネートする

ー地域・学校のつながりを編み出すー

これまで Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」という大きなテーマのもと、そうした展開を支える広報や記録、コミュニティを支える実践者の力量形成といったサブテーマで多角的に検討してきました。今回は、地域のコミュニティにおける学校にも焦点を当て、「地域とともにある学校」についても考えていきたいと思っております。少子化や情報化といった社会の変化のなかで、これまでの地域コミュニティの在り方にも変容が生じており、改めて今「社会に開かれた教育課程」の実現のために「学校と地域の連携」が教育改革における議論でも重要課題になっています。持続可能な地域コミュニティを醸成するために、地域や学校における実践者の方がどのようにそのつながりを編み直しているのか、それぞれの立場からの実践報告を共有するなかで一緒に考えていきたいと思っています。

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション）

福井市及び勝山市の公民館・福井大学探求ネットワーク・たかとの郷づくり協議会

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

シンポジスト	福井市一乗谷公民館・主事	松田 芳味 氏
	坂井市立丸岡南中学校・教諭	奥村 弘美 氏
コーディネーター	福井市生涯学習室	岩佐 誠 氏
	福井大学連合教職大学院	半原 芳子 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム

Session II シンポジウムでの話題提供を受け、小グループで実践の交流を行います。

Zone D

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

これまでZoneDでは、「子どもと教師の学びを支えるために保育研究・授業研究をいかに組織するか」というテーマで、特に探究的な学習を支えるためにどのように保育研究・授業研究を組織していくといいのか、考えてきました。

今回は、このテーマを掘り下げて考えていく視点として、「授業研究の文化をいかに創っていくか」に焦点を当てます。保育研究・授業研究は、ともすると公開保育や公開授業に向けて、準備を厚く重ね、それが終わると研究も終了という、いわば打ち上げ花火のような形式的な授業研究になってしまう危険があるものです。真に子どもたちの探究を深めていくには、1サイクルの保育研究・授業研究ではなく、教師たち

が持続的に協働で探究していく保育研究・授業研究の文化が不可欠です。そのためには、どのように研究のリズムを作り、どのように教師の協働探究を組織し、どのように基盤となる実践記録を編成していくとよいのでしょうか。

シンポジウムでは、こうした授業研究の文化を創ってきた小・中学校の実践報告に加え、アフリカ・マラウイ国において新たに授業研究の文化を創ろうとしている取組について実践報告をいただきます。

シンポジウムで出てきた問題提起を踏まえて、フォーラムでは、保幼小・中高・特別支援という3領域に分かれ、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。その手がかりとなるよう、校種ごとに話題提供をしていただきます。

授業研究の文化を創っていく上では、学習のありかたについて転換を図ることが必要であり、文化を築くまでには時間のかかるものでもあります。そうした苦労も含めて参加者同士で率直に語り合い、展望を探っていければと思います。

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-14:10 ナレッジ・フェア（ポスターセッション）
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

シンポジスト マラウイ教育科学技術省教員教育開発局 アルフレッド・カモド氏
福井市森田小学校・教諭 板垣 英一氏
信州大学教育学部附属松本中学校・副校長 宮下 哲氏
コーディネーター 福井大学連合教職大学院・講師 高阪 将人氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム 多様な授業研究・保育研究から学び合う

A 保幼小の実践に学び合う

信州大学教育学部附属松本小学校
福井県高浜町立保育所実践研究グループぴっか

B 中高の実践に学び合う

カリタス女子中学高等学校
福井市社中学校

C 特別支援教育の実践に学び合う

2/17(sun) 8:20-14:00

SessionIV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

▮ はじめに	8:30-8:40	ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。
▮ 自己紹介	8:40-9:00	それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。
▮ 報告Ⅰ	9:00-10:40	実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができればと思います。
▮ 報告Ⅱ	10:40-11:40	グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。
▮ 報告Ⅲ	12:20-14:00	報告Ⅱのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。

申し込みは、福井大学教職大学院ホームページにある参加申込書（Excel ファイル）に必要事項をご記入いただき、福井大学連合教職大学院代表メールアドレス（dpdtfukui@yahoo.co.jp）まで添付ファイルにて送付ください。

Schedule

2/3 Sun 長期実践研究報告会 / 第2回大学院入試ガイダンス

2/9 Sat 第2回大学院入試

2/15 Fri - 2/17 Sun ラウンドテーブル2019 Spring Sessions / 第3回入試ガイダンス

3/2 Sun 第3回大学院入試

【編集後記】118号の原稿執筆者は全員、授業研究・教職専門性開発コース（通称ストレートマスター）の院生の方でした。内容は本院での学びを網羅するかのようにインターンシップ、木曜カンファレンス、集中講座、公開研究会、各地のラウンドテーブルへの参加報告です。それぞれでの学びがあります。それが自分自身の中をくぐり抜けて、ご自身の言葉となって、表現されました。原稿をありがとうございました。（A）

教職大学院 Newsletter **No.118**

2019.2.3 内報版発行

2019.2.25 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp